

創元文庫

A-7

虛子自選句集

(春)

高濱 虛子

創元社

創元文庫

虛子自選句集

(春)

昭和二十六年十二月十五日 初版印刷
昭和二十六年十二月二十日 初版發行

定價 八〇圓

著者

高濱 虛子
たかひま せし

發行者

東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
小林 茂

印刷者

東京都新宿區東大久保二ノ七八
仙葉元太郎

發行所

株式會社 創元社
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
(大阪市北區槌上町四五)

電話 茅場町二〇六四・四〇八三・五二六三
振替 東京 一五六五・大阪 五七〇九九

印刷 中教 製本 鈴木

高濱虛子著

虛子自選句集

春

創元文庫

著者紹介

本名、高濱清。明治七年二日本名、高濱清。明治七年二に生る。池内庄四郎の末子に生る。池内庄四郎の末子嗣ぎ高濱姓を冒す。伊豫尋常嗣ぎ高濱姓を冒す。伊豫尋岡子規と知りて俳道に入り、岡子規と知りて俳道に入り就き、俳句革新の業を助けた就き、俳句革新の業を助け松山の雑誌ホトトギスを東京松山の雑誌ホトトギスを東昭和二十二年長男年尾に其主昭和二十二年長男年尾に其之を續けた。藝術院會員。主之を續けた。藝術院會員。

「雜詠選集」「新歲時記」「雜詠選集」「新歲時記」
「俳句讀本」「高濱虛子全集」「俳句讀本」「高濱虛子全集」
「風流饑法」「俳諧師」集「風流饑法」「俳諧師」
二つ「虹」「椿子物語」二つ「虹」「椿子物語」
「立子へ」「正岡子規」「渡」「立子へ」「正岡子規」

目次	二 月……………七	三 月……………四三	四 月……………一〇五	解說 高濱年尾
----	--------------	---------------	----------------	---------

明治二十四年から昭和二十年迄の全句稿の中から今度新たに自選したものゝを發表することにする。

句の排列は概ね私の「新歳時記」によるものである。

昭和二十六年九月

虚子

二月

春

高麗人や春帆かへること遅し

明治二七

餅うるや春を近江の三井の寺

同

おひつくもおくるゝも春の旅一人

同二八

上汐に追手に春の帆掛船

同

宮島

春の濱石燈籠の並びけり

同二九

百船に灯る春の港かな

同

寶塔の鐸落ちて響く春の庭

同

彌次といひ喜多入といひ春の人

同

翠帳に薫す春の恨みかな

同

愚庵十二勝のうち鯛柯石

石の上に春帝の駕の朽ちてあり
明治二九
春淋し浮世話をしにあがる
同
はらからの娘もつたる伯母の春
同三〇

脚氣を病みたる露月の京都に行くを送る

春なかば病の何の別れかな
同三三
舟下りて磯傳ひゆく春の人
同三八
我園の蝶の屍の數や春
大正七
筆をかんでいまだ書かざる妹の春
同八
角伐りはセル著る頃や奈良の春
昭和五
枯菊をいつまで存す春の人
同六
柔かな春の土なり杭を打つ
同
春の濱大いなる輪が畫いてある
同七
西山の山寺にあり春一日
同
灣の内濱瀬に立てる春の波
同八
緋鯉浮く水にうかめる春霰
同

旅は春赤福餅の店に立つ 同九

書物持つ手を後ろ手に春の園 同

還暦の春や昔の男なる 同

どの部屋も春のストーヴ燃えてをり 同一〇

鉛筆を落せば立ちぬ春の土 同

神あれば拜し且行く春の人 同

園丁の指に従ふ春の土 同

園丁の鋤にすなほや春の土 同

下りんとし畝一つ越す春鴉 同

春鳥真近く大きく飛びにけり 同

アントワープ行

石炭の山の麓の春の驛 同二

沙翁の誕生地ストラットフォードに向ふ

名を書くや春の野茶屋の記名帳 同

シエクスピア善提寺

春の寺パイプオルガン鳴り渡る

昭和一一

ロンドン郊外

賣家を買はんかと思ふ春の旅

同

かあと鳴く時うつむける春鴉

同 一二

春の波小さき石に一寸躍り

同 一四

春の波のうね傳ひ飛ぶ鷗かな

同

階にいつも人あり春の寺

同

春の土一列に杭打つて行く

同

大木を離れて根這ふ春の土

同

黒きうろ抱きて春の大樹かな

同 一五

物陰の椿は久し春の庭

同

春うたゝ昔の人の櫛あまた

同

眞赤なる琴の覆ひに春の塵

同

薄氷の上にかぐはし春の塵

同

飛びながら春の鴉の翅やすむ

同

唄 ひつゝ 笑まひつゝ 行く春の人 同 一六
 棒 杭の尖に 鴉や春の濱 同 一七
 春や昔石に 刻める庭師の名 同
 吹き立つは 落花まじりの春の塵 同
 やゝともすれば 春興の醒めがちに 同
 古稀の春無沙汰の庭を 歩きけり 同 一八
 大佛の下に やすらふ古稀の春 同
 何事も 春や昔と思ほゆる 同

小野燕子逝く

強 霜に 友情 春の如き人 同
 ハンド バッグ 寄せ集めあり春の芝 同
 京言 葉浪花言 葉や春の旅 同
 春の宿こじんまりとし 住み易く 同
 大和長谷観音
 御胸に 春の塵とや申すべき 同

春 塵や少し枯れたる木賊叢 昭和一八

ふ た り づ く 行 く 春 の 塵 同

春 埃 立 ち つ い き る る 上 野 か な 同

濱口今夜逝去。みづほ・素十に贈る

三 羽 る し 春 の 鴉 の 一 羽 る ず 同

立 春 立 つ や 六 枚 屏 風 六 歌 仙 明治二八

雨 の 中 に 立 春 大 吉 の 光 り あ り 大正七

老 納 火 燵 に 在 り 立 春 の 禽 獸 裏 山 に 同

春 立 つ や 芝 居 に も あ る 賀 の 祝 昭和九

春 立 つ と 銀 杏 大 樹 を 仰 ぎ け り 同二

力 新 た 春 立 ち 返 る た び ご と に 同 一八

大谷句佛追悼

立 春 の 光 り ま と ひ し 佛 か な 同

吉田高浪の父八十五歳にて逝去

春 立 ち し 如 く 大 往 生 と か や 同二〇

二月

川添ひの片頬つめたき二月かな

明治二七

二月きさ月らぎ

の・皆仰ぎ見る野山かな

大正一〇

寒明

木の間出る人に二月の光かな

昭和二三

六十の寒が明けたる許りなり

同九

初春

枯枝に初春の雨の玉圓か

大正七

早春

早春の鎌倉山の椿かな

同一五

早春の庭をめぐりて門を出でず

昭和二

二の替

老ぼれて尙座頭や二の替

明治三七

髪結は早見たと云ふ二の替

同

行くことに極めて恙や二の替

大正八

二の替古き外題の好もしき

同一四

本讀みの作者の風邪や二の替

昭和一四

繪ぶみして生きのこりたる女かな

明治三一

繪踏
初午

初午の行燈や藪に曲り入る

同四一

初午や篝焚き居る藪の中

同

針供養

年々	薪能	装束	針山	草の戸	小ざつぱりしたる身なりや、針納	納め針人に頼みの紙包	色さめし針山竝ぶ供養かな	幼きも針の供養のまとゐかな	賃仕事ためて遊ぶや針供養	午祭する祠あり空き邸	神主の肴さげたり一の午	芹田あり初午道の向ふ風	初午や女ばかりの戻り船	初午の祠に遠き行燈かな
同	同	明治三二	同	同一七	同	同一三	昭和四	同	明治三九	同一〇	昭和四	同一〇	大正六	明治四一

薪能

年々	薪能	装束	針山	草の戸	小ざつぱりしたる身なりや、針納	納め針人に頼みの紙包	色さめし針山竝ぶ供養かな	幼きも針の供養のまとゐかな	賃仕事ためて遊ぶや針供養	午祭する祠あり空き邸	神主の肴さげたり一の午	芹田あり初午道の向ふ風	初午や女ばかりの戻り船	初午の祠に遠き行燈かな
同	同	明治三二	同	同一七	同	同一三	昭和四	同	明治三九	同一〇	昭和四	同一〇	大正六	明治四一

雪解

薪能もつとも老いし脇師かな

雪どけに下駄はく僧や天龍寺

數石の左右の雪解や建長寺

雪どけや木曾の裏山家二軒

雪解川敷をめぐりて流れけり

雪解の山河目にあり舟の中

雪解の大河わたすや探梅行

叡山十句

雪どけに力餅やの亭主かな

雪どけや納屋に這入りて小半日

北谷の僧話しよる雪解かな

日がへりの僧が足駄や雪解道

雪どけの屋根を走るは馳かな

無動寺の巳の日詣りや雪解道

雪どけや谷の坊よりのぼせもの

同

同三七

同

同

同

明治三九

同

同四〇

同

同

同

同

同

同